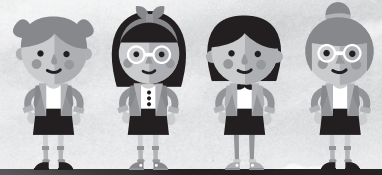


障がい児用のオーダーランドセル「ふわりいオーダーメイドUランドセル」をはじめ福祉貢献活動に尽力している「株式会社 協和」は、『ふわりい基金』を通じ、全肢連の事業に対し20年の長きにわたりご支援をいただいています。

この度、若松秀夫代表に支援活動について寄稿いただきました。

「ふわりい基金」の関係者の皆様に紙面より心から感謝申し上げます。



障がい児用ランドセルの誕生

株式会社協和 代表 若松 秀夫

今まで自分が知らなかったことを知るようにするには、何かのきっかけが必要で、そして、そのきっかけから、気が生まれ、知識へと導いてくれることになりました。そこには、世界に対する新しい認識が用意されています。私たち、協和の社員がこの認識へとたどり着くきっかけとなったのは、他ならぬ自分たちが作っているランドセルでした。

以前から、もっと軽いランドセルはないか、という消費者の声を耳にすることがありました。私たちは、子ども達のために、どのメーカーよりも軽く使いやすいランドセルを作ることを目指しています。

それでも、もっと軽いランドセルが欲しいという人は、何故そんなことを言うのでしょうか？お話を伺っていると、お子さんに障がいがあって、量産されているランドセルでは重すぎるし、使い勝手が悪いという事がわかってきました。毎年10数万個のランドセルを作っている、それらは障がいのない子ども達を暗黙の前提にしている、世の中には障がいのある子ども達もいるんだ、という事を、考えてもみなかったのです。こんな当り前のことに今更気付いて、大変に恥ずかしい思いをしました。

そこで、日本にはどのくらいの障がいを持つ子ども達がいる、どんな障がいかを調べてみることにしました。それが判らなければ、障がい児用のランドセルを開発することもできません。当時の厚生省や文部省、その他思いつく限りの役所などに問い合わせしてみましたが、有効な情報は全くと言っていいほど得られませんでした。

厚生省のある団体では、何故ランドセルメーカーがそんなことを調べているのかと、逆に質問され、ランドセルは、障がいのある子も含めたすべての子ども達にとって生活の一部であり、大切な教材と考えているからだと言えると、教材なら文部省に問い合わせくれ、などという始末です。

そんな悪戦苦闘が続く中で、偶然にも、全国肢体不自由児者父母の会連合会という団体を見つけました。早速連絡を取ってみると、そこは支部だったので、電話に出られた方は、ランドセルメーカーが障がい児の問題に関心を持っていることに、大変感激され、本部の上野事務局長へ連絡を取るよう親切に教えて下さいました。そこからは、まさにとんとん拍子に話が進みました。

私達が必要としていた情報のほとんどは提供され、障がい児用ランドセル開発の方向性が見えてきました。1999年のことでした。翌年には、会員のお子さん2名に、モニターとして試作品を使って頂き、沢山の貴重な意見を頂くことができました。こうして生まれたのが「障がい児用ふわりいUランドセル」です。

発売したその年には、200名ものお子さんから注文を頂きました。今まで、無理だとあきらめていたのに、ランドセルを背負って小学校に行けるなんて、夢のようだと、皆さん大変喜んで頂きました。これまでに7千人近い障がいを持つお子さんのランドセルを作ることができました。20年前に全肢連の皆さんとの出会いがなかったら、不可能なことでした。

障がい児用のランドセルがきっかけとなって、世の中には障がいのある子ども達が必要としている、という事に気が付き、障がいのある子も、無子も、みんな元気な一年生という、新しい認識へと導いてくれました。

このような仕事に携われることは、ランドセルメーカーにとってもこの上もない喜びであり、誇りでもあります。それを可能にして頂いた全肢連の皆さんには、心からの感謝を申し上げます。これからも、全肢連の応援団として、精一杯の支援を送り続けます。